

開催地名：埼玉県草加市	
開催日時	令和3年8月6日(金) 13:30~14:30 令和3年8月13日(金) 13:30~14:30
開催場所	高砂小学校マルチルーム
語り部	仲條 富夫 (千葉県旭市)
参加者	市職員(避難所担当職員) 約200人
開催経緯	草加市では、避難所担当職員を指名しているものの、日頃は防災部局でない若手職員が多数を占めていること、また、令和元年台風第19号で初めて避難情報を発令したなど日頃災害の少ない地域であることなどから、災害への意識や知識、想像力の低下が課題となっている。
内容	<p>(1) 震災被害の背景</p> <p>私は、千葉県旭市で暮らしている。この地域でも、平成23年3月11日に発生した東日本大震災で震度5強を観測した。旭市では、15時03分頃の茨城県沖の揺れの被害が一番大きかった。建物の倒壊や一部の地域で液状化現象、飯岡海岸等で大きな津波の被害が発生した。旭川市では、震災前も普段から定期的に避難訓練を行っていた。しかし、大きな津波を想定しての避難所の設営などの避難訓練は行っていなかった。そのため、実際に想定を超える大津波が来たことで結果として甚大な被害が出てしまった。</p> <p>(2) 東日本大震災を経験して</p> <p>地震に限らず、災害が起きた際は、まずは自分の身の安全、家族の安全を確保することが何よりも大事である。自分の身の安全が確保出来たら、近隣の手助けやボランティアの方と協力し、自力で動けない方や子どもや女性、ご高齢の方等への対応を行う必要がある。そうしながら国や県、自衛隊といった公的機関の支援を待つほかない。</p> <p>大災害の際には、避難所が一番大切であると感じた。各避難所には被害状況の異なる地域の子どもや女性、お年寄りなど様々な方が集まってくる。しかし、避難所に集まった人の中には、周囲を気にせず勝手な行動をとる人たちがいた。また、はじめのうちは届いた物資をお互いに協力しながら配給を行っていたが、時間が経つに連れて先行きが不安になり、他人を思いやれなくなってくるという事が現場では起こりえる。</p> <p>ボランティアの受け入れは、多い時は1日に最大1,800名近くの方が来てくれた。非常にありがたいことであった。しかし、状況を把握している人</p>

	<p>が極めて少なく、お願いしたい作業や活動に対してうまく人員を振り分けることができず、ボランティアの方の協力を十分に活かすことができなかった。各地域によって被害状況や対応の方法が異なるので、各地域の責任者が状況を把握してしっかりとルールを設ける必要があった。ボランティアの受け入れ態勢を整えて指示を出すことで、よりうまく連携を図ることができたと思う。</p> <p>(3) まとめ</p> <p>想定を超える災害が起こると、誰しものが普段通りの行動をとれなくなる。自分の暮らす地域の特性を理解した上で、まずは自分自身でできる準備をしておくことが重要である。</p> <p>避難所の安全をしっかりと確保することも必要である。避難所付近に、車を駐車して万が一災害が再発生して車などが炎上した場合、二次災害に繋がりがねない。最悪のケースを想定して避難所から車を遠ざけて二次災害を防ぎ、避難所、そして被災者の身の安全を確保することがもっとも大切である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>最近の各地の水害のほとんどが、自分の地域は大丈夫という過信や、事前の備えや早めの避難をしていないがために被害が甚大となっている印象がある。自分の住んでいる地域は過去に大きな災害はないが、最悪なケースに備えて、家族で避難場所の確認や防災グッズの準備を行っていきたい。</p>